

ともに 歩もう 石巻だより

2019年の春号と夏号を休刊し、ご無沙汰申し上げました。改めて、継続を心に誓い、朝日新聞記者がつづります。大切な記憶を、確かな記録に。

女川から出発⑥

あの日は小学6年生。中学校で活動を始めた。「千年後の命を守るために」その担い手たちの今を追う。

伊藤唯さん「学習院女子大学国際文化交流学部3年」 黙禱し涙した8年後

外気は10度を切る。今年3月26日夜。東京都渋谷区のライブハウスは若い観客の熱気で汗ばむ暑さだ。2曲目のラップ。大歓声がわく。歌手の背後に黒づくめのダンサーたちが並んだのだ。

上手に伊藤唯さんが立つ。都内の学習院女子大学で国際コミュニケーションを学ぶ3年生。人気グループEXILEの事務所が経営するダンススクールに通っている。

黒のジャケットから透き通るような白い肌のがぞく。凜とした表情で踊り出す。ビートを刻む速いステップ。キレのあるヒップホップ。表情を変えず、激しく舞う。少し前の憔悴(せうたい)しきった姿は跡形もない。

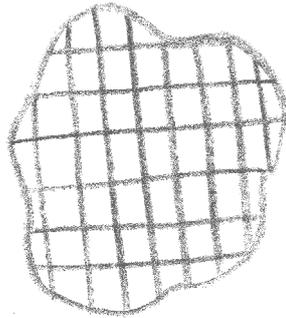
11日。レッスンを控え、今年は初めて帰省せず、都内の一人暮らしの部屋で黙禱(もくごう)し、涙した。夜のレッスンは楽しんだ。が、帰宅後、また思い出す。眠れば夢に見る。15日。限界だ。石巻市の母へ泣きながら電話した。母は、弱音を吐いたことのない

娘の異変にうろたえ、必死に言葉を探した。「泣きたくなるのは皆、同じ。考えないようにするの。切り替えてやってみな」涙声が返ってきた。

「どうすれば考えられないようにできるの。切り替えるって、どうやってできるの」

答えに窮し、しばし言葉を失った。ようやく出たのは「すぐ帰ってきな」。スクールの先生にもきちんと話すようにさとした。

先生は少し年上だが、同じ20代女性。電話口で優しく「どうしたの」。「震災のことを思い出してしまっただけ。泣いて話す唯さんにそれ以上は言わず」「この間だったもんね。とりあえず休んで」と応じた。先生は知っている。唯さんが女川町で



育ったことを。女川第二小学校(現・女川小)5年の時、友だちの誘いで石巻市のダンススクールで習い始めたことも。

小学6年のあの日。2階建ての家は1階が浸水し、全壊だった。直後に戻った時は家へ入る母を見送り、外で待った。見たくなかった。自らも入ったのは、その年末。1階の茶の間はからっぽ。さびしかった。

自身は覚えていないが、当時、「女川に住むのはこわい」と話し、母は石巻市に借家を探した。通学先は友だちと一緒に望み、二小そばで波を免れた女川第一中学校(現・女川中)へ入った。制服は流され、入学式は私服で出席した。ぼうぜんとした顔で写った式の写真が残っている。

友と話す時は丸顔にえくぼが浮かぶ。普通にふるまえば皆も笑顔になると願った。

踊れなくなった春

普通を装うのは苦しい。本音は泣きたい。が、泣けば何とかなると思うのはいや。その胸中を表に出すのもいや。中学時代は頭痛に悩み、訳もなく大泣きする夜が続いた。支えがダンスだった。石巻市のスクールがほどなく再開。踊れば頭痛も消えた。へ

明日の風

東京本社でその話を聞いた時、あの年から3年間駐在した牡鹿半島で出会った人々が思い浮かんだ。夏の参院選で世論調査部お客様係を務めた時のことだ。電話による犯罪が横行する昨今、世論調査の電話にも「本当に朝日新聞か」などの問い合わせが相次ぐ

▼係一同で手分けして応える中、年配の男性から電話が入った。前日に調査の電話があり「一晩中眠れなかった」と話す。その理由に胸をつかれた。調査は、コンピュータで数字を組み合わせて作り出した番号へ電話をかける▼ただ、最初に電話に出た人へ調査をお願いすると、日中も在宅のお年寄りや主婦が多くなる。「世論」を知るには様々な年齢層、職業層へ依頼せねばならない。が、コンピュータで作った電話番号なので、個人情報はなく、家庭の状況もわからない▼そこでまず家庭内の有権者数を尋ねる。教わった人数をパソコンに打ち込むと、画面に新しい数字が出る。「1」が出れば、依頼するのは、

発表会。観客席に、あの日から失われていた人々の笑顔を見た。自分の踊りで人々を笑顔にしたい。心に決めた。

仙台市の仙台育英高校に進み、途中、通信制に変え、今のスクールへ入った。週2回、バスで片道7時間かけて通い始めた。

一人っ子の唯さんを女手一つで育て上げた母は、あの日から、こう考えて、娘を後押しする。「明日どうなるかわからない。やりたいことはやったほうがいい」

唯さんは東京への一人旅に不安はなかったが、帰りのバスの待ち時間に緊急地震速報が鳴った時は、思い出し、JR浜谷駅そばの満席のコーヒー店にしながら泣いた。

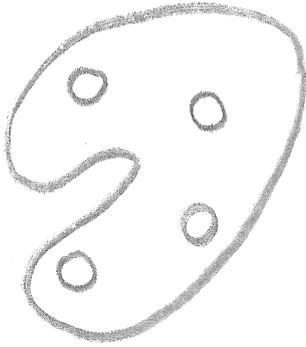
それでも「休みたい」と自ら言い出したことはない。一度、引き留める母を説きふせてバスに乗り込むも体調悪化し、福島で途中下車。母に車で迎えに来てもらった。

そのダンスが今年3月、できなくなつた。15日。帰省した。あの日まで暮らした女川港北岸の石浜へ行った。新しく造られた浜の高台に、真新しい大きな石碑が立つ。

石に手をあてて、碑文にじっと見入った。中央に大きく「女川いのちの石碑」と刻まれている。脇にもう一文彫つてある。

「愛すべき 未来のために
我が道を」

唯さんが中学1年の春、国語の授業で書いた句だ。何を詠んでもよいと言われ、まず思い浮かんだのは、EXILEの歌『愛すべき



未来へ』。国内外からの支援への恩返しは、ダンサーになること。決意を詠んだ。

20日。東京へ戻った。先生は「お帰りー！」と声を上げ、抱きついてきた。

石碑は、中学1年の社会科の授業を通じて六十数人の学年全員で考えた津波対策の一つ。募金活動で資金を集め、町内各浜に建立し、あの日の教訓を刻む。碑文も同級生全員で考えた。あの春の生徒の俳句も刻むことにした。句は浜ごとに異なる。

その取り組みに当初、唯さんは乗り気でなかった。あの日に触れられるのを恐れた。

「ひとのぬくもりが一番」

中学3年の秋、石碑1基目が完成。半信半疑だったのに本当に実現した。涙が出そう。喜びをゆつくりとかみしめた。

そこからだ。別々の高校へ進んだ後も休日に同級生らと集い、各自の経験を書いた本『女川いのちの教科書』を作った。

唯さんはこう記している。

「伝える。ことは私たちの使命です」

昨年6月。千葉県勝浦市のJR勝浦駅に降り立った。広い空。2階建て交番の先に並ぶ小さな店。

あの日までの女川駅前のように喪失感が迫り、一瞬、胸が苦しくなる。

その日は、市内の小中学生約800人を前に講演した。当時の写真も見せた。よみがえる記憶と恐怖をぐつとこら

える。

質問も受けた。「避難所で一番『あればよかった』と思ったものは何ですか。備蓄品の問いただと察しつつ、口をついて出た答えは「ひとの存在です。ひとりには心細い。ひとのぬくもりが一番よかった」。

あの時。小学校にいた。学校より上へ。坂を駆け上がる途中、山の下を中心街を見た。一面真っ黒。渦巻く家々。立ち尽くす。「何してるの!」。友の一喝。また走る。

総合体育館で過ごす夜。寒さか恐怖か、ふるえが止まらない。あちこちで赤ん坊が泣く。その声が反響する。自分も泣いた。

級友と一緒にいた。彼女の母親が来て、「お父さんが流されたかも」と告げるのを聞き、彼女たちを思いやる余裕も失い、泣き出した。自営業の母はどこへ仕事に出たのか。級友も、彼女の母親も、優しくかった。自分たちの悲嘆は封じて「大丈夫、お母さん来るから」と励ましてくれた。

体育館へ祖父母が来た。叔父も来た。が、母は来ない。「ママどうだろう」と祖母が漏らした時、ついに泣き崩れた。不安がのしかかり、もう立ち上がれない。「どうしたの」。父親をなくした級友も寄ってきて言ってくれた。「せつたいに大丈夫だ」

母は3日後、石巻市渡波から泥まみれで町にたどり着いた。会う人ごとに「唯ちゃん待ってるよー!」と言われながら入り口へ。目が合うや、娘は「いやー!」、母は「ゆいー!」と絶叫。抱き合い、号泣した。これ以上多くの命を失うことはあつてはならない。その一心で伝え続ける。

「年齢が上から1番目」の人。年長者に偏らないようコンピュターは時に「2」や「3」も選び出す▼その手法がまだ知られていない。前日、「4人」と教えてくれた男性も予期しなかったろう。出たのは「4」。依頼は4番目の人へ……。その人が亡くなっていて、その男性は口にはせざるをえなかった。弟妹か、子か孫か、語られずに男性からの電話は切れた▼女川町の横山美和子さんの言葉を思い出す。安置所で写真に目をこらそうにも涙でぼやけてね……。あの日から3歳の孫の帰りを待っている。娘は家に孫の写真をかざらない。なぜ遺影が要るだろう。今は小学6年生。今も一緒。これからも崩れ落ちそうになるのを必死にこらえている人々にも調査を依頼していることを自覚する。先述の手法により定例の世論調査で選ぶ1人は、約5万人の意見を代表することになる。5分ほどの電話調査ではあるが、そこで知る一人ひとりの意見はどれも貴重だ。あの悲しみを繰り返すまいという決意もそこに詰まっている。

雄勝巡礼

第2章

石巻市雄勝町の港そばにあった
雄勝病院の家族の話が続けよう。

[第8回]

美術室の教え 今も覚えている

雄勝港から道なりに約4キロ東の大浜。海を見下ろす山腹に三角屋根の校舎が立つ。今は町内唯一の小中学校となった雄勝小と雄勝中が一緒に入る、まなびやだ。2017年7月に竣工。児童17人と生徒15人(19年11月1日現在)が通っている。11年3月。

町内に小学校は3校、中学校は2校あった。雄勝港近くの雄勝小と雄勝中、大浜からさらに東の大須小と大須中と、大浜の北の山を越えた先の船越小だ。船越小と雄勝小の進学先が雄勝中だった。3学年いずれも当時すでに1クラスだった。

あの日の2日前。
3月9日午前11時45分。
雄勝中は授業中だった。

ゆれた。震度4だ。
職員室で佐藤淳二校長(現・仙台市立錦ヶ丘中学校)は即決した。「これはもう全員、外に出して、やるう」。生徒が「またか」と軽く考えないように。

1年生は美術室にいた。その1人、佐々木花菜さんは、いつ

たん机の下へもぐり、それから校庭へ出たことを覚えている。

2年生も校庭に出てきた。3年生は高校受験で不在だった。

佐藤校長は皆に説いた。

「雄勝に津波が来る場合は、十数分で来るからね」

念頭に、近く来ると言われていた宮城県沖地震の想定調査の結果があった。新聞で読んでいた。教職員とも話していた。

職員室へもどり、校長が誰に言うともなく「これが予震(前震)にならないといけない」と話すのを、島山良彦教頭(現・スクールソーシャルワーカー)が記憶にとどめている。

校庭の校長の話は、佐々木花菜さんの記憶にはない。が、美術室へもどって

から、瀬戸千恵子教諭(現・河南西中教諭)がこう言ったのを今も忘れない。

「こういう地震の何日後に大きい地震が来て、

津波が来ることもあるからね」

「そんなことねえべ」と皆で笑っていた光景もよみがえる。

その晩、瀬戸教諭は石巻市中心部の自宅に帰ると、母にも避難場所を確認し「すぐ逃げれば大丈夫」と話した。「十数分で来る」という宮城県沖の想定調査結果をテレビで聞き、記憶に刻んでいた。前回1978年の宮城県沖は中学1年で経験した。

雄勝中には2005年4月に着任した。美術室外の地盤が大雨で削られたこともあり(雄勝は気象が厳しい)と感じていた。

国道398号が通勤路で、雄勝港の北西、釜谷トンネルを使った。(ここで山津波が起きればとじこめられる)とこわかった。町内の安全な避難先に港の南西、森林公園を考えていた。

雄勝中から海まで約0.4キロ。校舎は3階建てで、

屋上もあるが、佐藤校長は「この近さで津波の避難場所というのはありえない」と他校の校長に話したこと

がある。生徒がいれば校舎前の山へ、生徒がいなければ森林公園へ——。職員室

でそう話していた。

ただし、約5キロ内陸の森林公園へ車で行くには、海まで約0.2キロの橋を渡らなくては

手書きの名簿 今も恩師の元に

佐藤校長は理科教諭。

前回の宮城県沖を高校3年の時、石巻線の列車内で体験した。

雄勝中には10年4月着任。2月のチリ津波の直後だ。町内では「またか」と避難しない人もいたと聞き、心にとめた。

教職員には「皆が避難マニュアルをもとに動けるようにしなくては」と話し、たとえば雨の日に「今ならどうやって子どもたちを逃がそうか」と口にした。

そうして校長は防災を日常的に話す雰囲気をつくった——と島山教頭はふりかえる。教頭は社会科教諭。宮城県沖は大学時代。7歳の時の県北部、14歳の十勝沖の体験も記憶に鮮明だ。

雄勝中には09年4月着任。雄勝湾の形をひと目で1960年のチリ津波で被害が大きかった志津川湾に重ねた。(もし来たらかなり遡上する)と思った。

あの日。

卒業式を終え、生徒が下校した後だ。弱まったゆれが再び強まり、教頭は声を上げた。

「だめだ。これは。いつもと違

ならない。逃げる時に海へ向かうって危険だよ——。そんな話もしていた。近隣の人々も橋を渡るので渋滞も心配だった。

う。出ましょ。校舎が倒壊すると思った。出ながら叫んだ。「次、津波だよ!」

その中で瀬戸教諭はカバンにハードディスクを入れる。1階職員室の水没を確認。昇降口のげた箱が倒れる音も耳に、荷造りを急ぎ、最後に職員室を出た。

校庭で瀬戸教諭は迷わず呼びかけた。「森林公園へ逃げましよう。渋滞したら困るから教頭先生の車で行きましよう」。教頭も「とにかく乗って乗って」と自分のワゴン車へせかした。

橋は渋滞前。教頭が見た川の流れば、海へ吸い寄せられるように速まっていた。

森林公園に最初に着いた。町の人々が来た。生徒も。素足の子もいた。泥だらけの子も。森林公園には翌日朝までに約400人が避難してきた。

その夜、教職員は車中で過ごした。教頭は外のたき火を目にした。囲むのは何十人もの人々。皆、無言だ。胸をつかれた。校長がつぶやいた。「悲しくなるほどきれいな星空だね……」

あの日からの原発② | 朝日新聞 科学医療部記者 上田俊英が記す |

日本の原子力政策の本質的欠陥 「願望主義」の芽を摘もう

日本の原子力政策の本質的な欠陥は、原子力開発に携わる人びとの間にはびこる「願望主義」だ。原子力の計画は、たいていは関係者の願望にすぎず、実現可能性が問われることはまずない。実現できなくてもだれも責任をとらず、余計に費用がかかれば税金と電気代で回収する。その歴史が繰り返されてきた。

「願望主義」は日本の原子力界を、その黎明期から支配してきた。

物理学者として日本の原子力開発と生涯かかわった田島英三さん(1913～98)の自伝『ある原子物理学者の生涯』(新人物往来社)が手元にある。

田島さんは戦時中、理化学研究所で原爆の開発研究にかかわり、戦後は原子力委員や、初代の原子力安全委員などを歴任した。原子力委員のとき、安全の専門家を常勤委員に加えるよう提案し、政府に受け入れられないと、抗議して委員を辞任するなど、原子力の安全と原子力行政の改革に生涯、心を砕き続けた。

田島さんが原子力委員になったのは1972年。政府はこの年、原子力開発の「長期計画」を5年ぶりに改定する。東日本大震災で炉心溶融事故を起こした東京電力福島第一原発は、1号機がその前年に運転を始めたばかり。日本では、まだ5基の原発しか動いていなかった。

新長期計画は、90年度に1億キロワット程度を「原子力発電でまかなうことが要請されている」とうたった。20年ほどの間に出力100万キロワット級原発を100基稼働させる、というのだ。

自伝に、この計画に対する田島さんの思いがつつられている。

「このような計画はどう考えても達成出来るとは思えないし、この長期計画に対しては当然原子力委員会が責任を負うべきものと考えたので、委員会の席上でこの計画の根拠を尋ねたところ、『これは努力目標です』という答(こたえ)がアッサリと返って来た。私は啞然(あぜん)とした。信じられないことであったが、これは日本の官庁の常識らしく、まともな実現可能予測と受(うけ)取る方が滑稽なのかもしれないと思った」

いま、日本で動いている原発は9基。出力総計は900万キロワット余。滑稽だったのは政府の計画の方である。

「願望主義」は福島で破綻した。原子炉損傷のような「過酷事故」の対策について、日本では事故が起こるまで、義務化されることはなかった。「過酷事故は起こらない」という関係者の願望が、政策に反映されてきたからだ。

日本は世界最大の地震国で、世界のマグニチュード6.0以上の地震の2割は日本周辺で起こる。また、世界有数の火山国で、世界の約1500の活火山のうち111は日本にある。しかし、こうした自然の猛威も過小評価されてきた。

その「願望主義」も、もはや世間には通用しなくなってきている。

原子力規制委員会は今年4月、テロ対策施設の建設が設置期限に間に合わない原発には、運転停止を求める方針を決めた。この結果、再稼働している9基のうち、少なくとも7基は今後、運転停止に追い込まれることが現実になった。

テロ対策施設は福島で事故を受けて設置が義務づけられたが、大規模工事が必要なため、安全対策工事の審査終了から5年間は未設置でも運転ができるよう、ルールが緩和された経緯があった。原発を再稼働済みの九州電力、四国電力、関西電力は設置期限のさらなる先延ばしを求めたが、認められなかった。

とはいえ、「願望主義」の根は深い。

仏ルモンド紙は8月31日、日仏両国が共同研究をすすめる高速実証炉「ASTRID(アストリッド)」について、仏側が開発計画を停止すると報じた。

日本は原発の使用済み核燃料を再処理してプルトニウムを抽出し、高速炉(高速増殖炉)の燃料に再利用する「核燃料サイクル」の実現を国策としてすすめてきた。16年12月に中核施設の原型炉「もんじゅ」(福井県敦賀市)の廃炉が決まっても、政府はそれに代わる研究開発の柱にアストリッドを据え、「核燃料サイクル堅持」の旗を掲げ続けている。そのアストリッド計画が停止されたというのに、政府の政策は変わる気配さえない。

規制委では東北電力女川原発(女川町、石巻市)2号機の再稼働へ向けた審査が大詰めを迎えている。「合格」すれば、残るハードルは地元同意だ。日本の原子力界にはびこる「願望主義」。その芽を摘むのは、私たち国民の役割である。

雄勝中は全壊だった。避難を急ぎながらも、学校へまた戻れるという気持ちがあった校長は公園で(あ、名簿一つないんだ)と気づいた。「全員、書けますよ」

数学の坂下祥子教諭「現・理町立吉田中教諭」が告げた。

3年担任だ。雄勝中は初任地。赴任して2年。同僚に確かめつ

つ、77人全員を学年別、五十音

順に漢字で書き出す。「齋」や

「櫻」も区別し、ルビもふる。

坂下教諭と瀬戸教諭は卒業式

のはかま姿だった。翌朝、被災

をまぬがれた教え子の家で服を

借りた。自宅が流された瀬戸教

諭は、10日間その服のまま、生

徒の安否確認に駆け回った。

2018年1月7日。

大浜の新築校舎で成

人式が開かれた。司会

は新成人2人。佐々木

花菜さんと牧野陽紗さ

んだ。

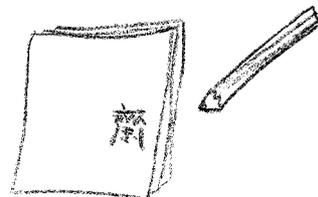
ともに、自分で選ん

だ振り袖がよく似合っ

ていた。あの日、佐々木

さんの母弘江さんも、牧野さん

の母まり子さんも、勤務先の雄



勝病院で最後まで入院

患者と一緒にとどまった。

牧野さんが佐藤校長

を紹介した。校長はマ

イクを右手に、左手で

坂下教諭の手書き名簿

を掲げた。全校生徒77

人の氏名冒頭を丸や斜

線が埋めつくす。

「ひたすらに君たちの無事を

願って一人ひとり捜していきまし

た」。伝聞は除外。目撃証言を

追った。「8日後。3月19日19

時6分、奇跡が起きます。君た

ちは全員無事でした。その時の

喜びを佐藤校長は著書『たくま

しく生きよ。』に詳述する。

新成人19人へ、校長ら恩師16

人が順に祝辞を贈る。保護者も

目頭をおさえて耳を傾けていた。